

そこは「星空も照らすのをためらうところ」と言われた界限だった。どこかで聞いたそんな一節を思わずジョン・マレーが口にする。

先に行くバイロン卿が応じて言った。

「そりやあつまり、星が足りないからだろうよ」

「地獄の対義語は、何だと思う」と、暗黒の中でバイロン卿は尋ねた。

後にしたがって歩くジョン・マレーは、応えなかった。

「天国、じゃあないんだぜ」

「なら、この世、ですか」

「なんだい、そりや。ちがうんだ。地獄の対義語は、『混沌』さ。一見、同義語のようだが、実は対義語だね。地獄というのは、天国と合わせて一つのシステムだからな。そこには既に、神の御心がはたらいている。ということは、光あれ、以前の混沌こそが、地獄の対義語。さらに、混沌の対義語というと、それは『調和』となる。ここが面白いところだねえ」

ジョン・マレーはただ黙ってついて歩く。バイロン卿は独り言のように続けた。

「この界限もやがて、もつとはつきり、地獄として区画整理されていくような気がするな。天国を天国たらしめるには、地獄が必要なのだ」

ぬかるんだ路地のその暗黒の中に、二人の姿は溶けて消えそうになる。

異風好みのバイロン卿が頭に巻いたターバンは、ロンドンの他の場所ならいざ知らず、この界限ではかえって周囲に溶け込むちょうどよい変装だった。

卿はテムズ河に沿ったこのあたりのことを「ニュー・ヴェニス」と呼んだ。水辺という点でかろうじて結びついているということか。否、ロンドン中の危険と汚物が集まった吐きだめにそんな名をつけるところに、バイロン卿らしい天の邪鬼があった。ここには異国の物資を積んだ船がくる。昼に荷の積み下ろしに精を出していた人足たちが、夜にはそのまま夜盗に変わる。出自の怪しい、名家の紋章入りの金時計もこの界限に持つてくれば支障なく金に換えられる。中国人やムスリム商人には、紋章の柄などどうでもいいのだとみえた。物でも人でも、金でどうにかなる。女も買えるし、男も買える。まっとうなイギリス商人がまだ知らない物品もここでは取引され、貴族の御用聞きが法外な言い値を平気で払って買っていく。動物だの、植物だの、

薬物だの。生きる糧を失って都市に貧民が流れ込み始めた時代である。そんな貧民を受け入れる余裕もこの界限にはあった。ただし、腕力だとか運だとか、そんな何かを持っていなければ、たちまち川面に浮くことになる。

卿は、背後についてくるジョン・マレーに向かってなのか、あるいは独り言なのか、ぼつりと「天は自ら助くるものを助く、というよなあ」とこぼして、定宿にしているアヘン窟「アズハル」へ向かって歩いていく。

「こんなところで寝転がって。知らんぞ。てめえのことはてめえの責任、と」道端に転がっている上半身裸の男を見て卿は言ったと見えるが、後について歩くジョン・マレーには、その男がどうみても既に死んでいるとしか見えなかった。

ジョン・マレーには、バイロン卿がこんなふうに出る暗黒街で屍になり果てる想像はできなかった。決してそうはならない運命にこの若き貴族があるような気がした。やはり、異国の清明な空の下で豪放磊落の果てに死ぬような画がふさわしい。湿った風すら汚れているような気がする、こんな吐きだめ。そこにはまったく不釣り合いな、柔らかく波打つ金髪に包まれた端正な相貌がそう思わせるだけなのだろうか。せつかくのその美しい髪をターバンなどで隠している異風好みもまた、卿の天の邪鬼ゆえなのかもしれない、とジョン・マレーは思った。

二本指でつままれた金貨が、ろうそくの頼りない灯をうけて光っている。それをもの欲しそうに見つめる褐色の肌のボーイを尻目に、バイロン卿は語りだした。

「神様つてのはね、このコインみたいなものだけ、マレー君」

「そりゃあ、どちらもありがたいものつてことですか」と、ジョン・マレーが返す。

「つまらんことを言うねえ。ありがたいもんか」

「ですが、このボーイはそれを早くいただけたほうがありがたいでしょう」

「おっと…すまん。そら」

卿は、二人がついているテーブルの上に煙草をおいてからしばらく手持無沙汰で立つていなければならなかったボーイに、ようやく代価を手渡した。

卿は煙草を一本つまんで長椅子に横たわり、背の下に入れたクッションの位置を直し直し、そして舌打ちした。

「おっと、火をつけるの忘れたよ」

ジョン・マレーは、テーブル上の蠟燭で火をつけた煙草を一本、卿に渡してやった。

卿は胸板をふくらませるように吸い込み、そしてゆっくりと吐き出し、パツと目覚めるように微笑んだ。バイロン卿は眠気を催すアヘンとは違う別の麻薬を好んだ。この界限でも、まだあまり出回ってはいないものだ。それを都合してくれているのはキプロス生まれだというこの宿の主人だが、卿はその主人から口止めされていた。それでバイロン卿はその麻薬を「アムリタ」とか「甘露」と勝手に名づけて呼んだ。

「それで、さっきの言葉のこころは」とジョン・マレーが尋ねた。

「うん？さっきの。ああ。神様と金貨か、それはな」と、バイロン卿はもうひとつ吸い込んで味わった後、続けた。

「トルコ人たちも、われわれも、ついでにカトリックもユダヤ人もひつくるめて、みんな、信じている神様自体は変わらんのだけ。おなじものを、別の方から見ただけさ。表側か、裏側か。それですこしばかり奉り方がちがうだけのことだが、それだけで殺しあうほどの敵になる」

「まあ、そういうこともあるでしょうな」

「いや、実はそうじゃないんだ。おれは思うんだが、人間がこの世に出てきてこの方、神様の事を理由にして本気で戦争をしたことなんか、一度もないのさ」

「そうですね。その昔、十字軍ってやつを送りこんで我々のご先祖はトルコ人と戦ったんでしょう」

「戦った。しかし、神様が理由だったわけじゃないさ。これが理由」と、卿はまた別の金貨を指でつまんでひらひらさせる。

「人間ってのは、どうもお金を理由にして何か事を起こすのを恥ずかしがるものなんだ。よそ様の持つてるお金が欲しい。こつちへいただこう。となったとき、銃でもナイフでも突きつけて、金よこせ、とやる悪漢の方がよっぽど正直だぜ。だが往々にして人間は何かえらそうな題目を突き付けて、その金がこちらへ回ってくるように仕向けるのだ。権利だの、正義だの、神様だの。そんなことを大将が唱えだすると、下々の兵隊たちは、なにか偉そうな気持ちになって戦えるというわけで。ああ……」

卿はそれだけ語るのにひとまず疲れてしまったとみえた。ジョン・マレーは火をつけていない煙草をいじりながら、卿の呼吸を二、三度見守った。卿はアムリタに助けを求めるように、また深く吸い込んだ。

「それが、二年間の見聞の成果ですかい」と、マレーは初めて聞いたような相槌を

打つ。前にも聞かされたような話だった。

「うん…つまるところ、人間は人間、おもしろいやつとつまらんやつがいるというだけのことで。トルコ人つてのは、面白いやつが多かった」

「どんなふうに？話が面白いんですか。本をお書きになるネタをもらってきたとか」「なんていうか、ああ…眼の開けている人間が多いというか。君、光は東方より来たり、これは古代の話じゃないぜ。」

ジョン・マレーは、ようやくとうとうとしてきたバイロン卿の様子を見ると、左手だけひよいとかざしてボーイを呼び、小声で「茶をくれ」と言った。すると、卿は眼を閉じて横たわったままマレーに言う。

「君、良識ある英国紳士なら茶など飲むのはやめておけよ。悪趣味極まりない…」ああ、またこれが来た、とマレーは苦笑いする。卿の前で茶を飲もうとするということもこう来る。

卿曰く、茶だコーヒーだとありがたがって、ちびちびすすっておすまし顔する欧州人の肖像を、アフリカやアジアでは悪魔だ鬼だと指さして忌み嫌っているのだという。「英国人の一服」というカリカチュアが、トルコの新聞によく載っていたつけ、などとうそぶいては笑っている。

「こうしてヤクをね、しかもアヘンよりきつついアムリタをな、やっているのも、これは贖罪なのだよ、君。世界に対する罪を、こうして英国人みずから負って購わんといかんのだ。われわれ貴族などは特に率先して…」

アジア風に煙草でヤクを吸うのがもつと効くんだ、そういう宿があるからついてこい、といってマレーを最初にここ「アズハル」へ連れてきたのは卿の方だった。看板を掲げているわけではない。常連客の後についてこなければここへはたどり着けないだろう。バイロン卿が勝手にここを「アズハル」と呼ぶだけだった。

貴族だと言つて皆が皆品行方正だとは思わないが、貧民街のどん詰まりにあるこんな所に自ら出入りする男爵などいるだろうかとマレーはいつも思う。

ジョン・マレーが、この年下の男爵と初めて出会ってからまだ半年あまりだ。教養は豊かだが、口について出る悪態はより豊かだ。母親譲りという美しい相貌は女をだますためにこそありといった感じ。

父親である亡き先代バイロン卿もかなりのろくでなしで、自分の財産を食いつぶし

ただけでは足りなかった。奥方の実家はスコットランドの名家ゴードン家。その昔、スチュアート朝初代王ジェームズ一世の母君でもあったスコットランド女王、メアリー・スチュアートは新教派の貴族を執政に置いたが、それに対し反乱を起こしたのが旧教派のゴードン家。後にその執政がイングランドのエリザベス一世と通じて反乱をおこすと、本来旧教派であった女王メアリー・スチュアートはゴードン家を許して反乱鎮圧にあたらせ、ゴードン家は見事お役目を果たした。そんな名家まで傾かせた先代の、その血はこの美しき青年にも流れているのだろう。

だが、この若い卿には、地元ノッティンガムの悪い評判にのぼるのがせいぜいだ。た先代とは違う、華がある。父方の家名よりも「あのゴードン家の裔」と評されるのだが、それはバイロン卿自身の持つ華ゆえではないか。

事実、つい最近もこの若い卿の記事が新聞を飾った。

義賊だ。ジョン・マレーはそう思っている。卿の地元ノッティンガムの伝説にあやかって、マレーはひそかに卿を「赤面のロビン・フッド」と呼んでいる。算段とか、目標とか、そのようなものを何も持たず、義憤や情熱に駆られて卿は事をおこす。あとでそれを非常に恥ずかしがる。それで、酒など流し込んで赤面をごまかし、悪態や嘘で塗り固めて隠してしまう。

数か月前。卿はどこからインド人の若者を拾ってきては、このアヘン窟に連れてきて、何かの役にはたつき、と言って宿の主人に雇わせたという。若者は卿が来るといつも忠誠めいた輝きを目に灯して仕えるのだ。どうみても、恩義を感じている姿だ。卿は多くを語らないが、どこかの商人か貴族の屋敷から逃げてきたに違いない。よくある話だ。それでいて卿は、

「おまえさんにはこういう貧民窟のほうがお似合いなんだよ」と悪態をつく。

一八一一年夏、バイロン卿は二年にわたる外遊からイギリスへ帰ってきた。借金でどうにか旅費を作って、あてない放浪の末、退屈になつて帰ってきたというのが世間の評判だが、ジョン・マレーはどうも腑に落ちない。先代以来の零落ぶりが有名なバイロン家に金を貸す者などいるのだろうか。いまだきの小貴族は目ざとく企業でもするか官庁のお役目でもいただかないことには成り立つものではない。地代に寄りかかっていられる時代はとうに過ぎた。先代バイロン卿のように時代を読むことも知らぬ貴族はつぶす財産がなくなればどうしようもない。

帰郷したばかりの卿はこの伝をたどったのか、出版業をいとなむマレーに連絡をつけてきて、最初の邂逅からいきなりこの暗黒街の深奥へ連れてきた。

「君、紀行文を出版してみる気はないか」

それが卿の最初の用件だった。聞けば、二年も気楽に外遊して、島国人種の興味を引くようなことをたくさん書けるからひとつどうだい、と。それでは原稿をぜひ見せていただきたい、という、と、卿は、ばかいつちやいけない、本を出すと決まらんうちから書くような無駄をやるものか、出すというなら書いてやるさ、と来た。

まず書いてもらわなくちゃあどんなものかわかりませんし、とマレーが困ると、卿は、俺の旅はなあ、といって、旅程を語りだした。アムリタを吸いつつ吐きつつ、話は前後するは、同じことを繰り返すは。しかし二年も旅をしていただけあって、内容豊富ではあった。

まずポルトガルはリスボン。そこから内陸へ行ってスペインを覗いた。そしてイタリア、ギリシア、トルコは帝都イスタンブルのほかエジプトへも足をのばした。

行く先々で、その地一番の女を手に入れてはうたかたの恋を味わって、と卿の語りが続く。しかしマレーはやや穿った見方をしていた。マレーの父親はその名も同じジョン・マレー1世、海軍士官として国に仕えるやはり小貴族だったが、心機一転企業を志し、ロンドンではアルバマール街に出版社を立ち上げたその人である。マレー2世はその出版社を継いだ、父親からの血か、バイロン卿の旅の話に政府の影を感じた。

「大陸はどうでしたか。ナポレオンの天下はまだまだ安泰ですかね」とマレーは水を向けてみたが、卿の反応は薄い。

「不粋だなあ。旅の楽しみは酒と恋だぜ、君。それからできれば面白い友が見つければなおいいというものだがなあ。君、トルコ人というのはなかなか面白いやつが多かったぜ、なにしろ頭のいいやつが多い」

「どうです、ひとつ、紀行文よりも小説なぞ書いてみては。政府の密偵たる若き貴族、目指すは新帝ナポレオンの支配する大陸よ、なお独立を保つポルトガルを足がかりに、フランスの動静を探り、たくらむところはトルコ皇帝と手を結んで、大陸諸国のナポレオン軍を挟み打ち、の大計画。てなところで。ところどころに大陸の風物を織り込めば、そりやなかなかの読み物ですよ」

「いや、文芸などはこりごりだ。まえに詩集を出したことがあるが、批評家のかつこの憂さ晴らしの的になっちまった。まったく、批評家ってのはよ…」

「詩などというものは、そりやあもう民衆から離れすぎなんですよ。いまは読み物の時代です」

マレーは、卿が政府からまとまった予算を受けて外遊に出たのではないかとふんだ。落ちぶれたとはいえ貴族は貴族、先代が死んだおかげで、この若さで上院に議席だつて持っている。ケンブリッジを出た学士でもあるし、なにしろ若いからそんな仕事を与える相手としてはもってこいではないか。それで、小説の筋にみせかけて鎌をかけてみた。

ところが卿は、あやしい紫色のけむりをくゆらせながら「おれはじつは大陸側の密偵なのだよ」と言いだした。

「英国とトルコ、どう結ぶか、あるいは…それを大陸の方に伝えるのだ。君は、おれの重大な秘密を見抜いたらいいな。ということは、生かしてはおけんぞ…」

マレーがおもわずぶつと噴きだして笑うと、卿もせき込みながら笑った。せき込むのも疲れたというほど笑った後卿は、

「物語というのも、面白いなあ。やってみるかな。君、原稿みたいのかい」

「もちろん」

「じゃあ、一番に見せる相手は君にしとこう」

数週間後、二人はまた同じアヘン窟で会った。それからというもの、二人が会うときはその場所と決まってしまったようだった。自分ひとりならこの界限には近寄らないが、卿と一緒にならしかたない、とジョン・マレーは納得している。はつきり分かったわけではないが、こういう場所ならこの若い卿は自由でいられるのだ。そして自由な卿の内側から何か引き出せば、面白いことが起こりそうだと、ジョン・マレーは感じていた。

卿は原稿を持ってきた。この数週間の間に書いてきたものではなかった。始めの方ほど、紙が古味を帯びているように見えるし、端が折れていたり破れ目が入っていたり、それにいたるところ推敲の跡が入っている。二年間の旅の間、書き続けていたものと見えた。

ジョン・マレーは原稿に少し目を通してすぐさ言った。

「詩なんですね」

「詩はまずいかなあ。うん、たしかにそりやあ、詩だ」

既に卿は快い陶醉に包まれ始めていた。

「だってな、おれは実際、密偵でも何でも無いし、ただ遊びただけだから、物語の筋なんてものは、自然とこういうものになるよ…。このあいだの話を本気にしちゃいないよな。おれはホブハウス君の尻にくつついて行っただけなんだ。彼こそ将来の外交家、政治家つてもものさ。そういうわけ…」

原稿の一枚目には『チャイルド・ハロルドの遍歴』と題名が書いてあった。長い物語詩で、恋に破れた青年が異国への旅に出るといふ筋がある。抒情をうたうところもある。卿が旅に出る前、ケンブリッジに在学中『怠惰の時間』という詩集を出して、エジンバラの雑誌に酷評されたというのは、卿と会う前からジョン・マレーも知っていた話だ。このあいだ文芸などこりごり、と言っていたのはただの照れ隠しのようなものだったのだ。どうやらこの男は根っから詩人であるらしい。

「おれはね、ごたいそうに詩などというものをおすまし顔で書くような性分じゃないぜ。サロンでおべっか言い合いながらお互いご満悦の文芸なんぞ、気持ち悪くつてしかたない。こりやあね、いい女を見かけちゃあ、さあどうやって口説き落とそうか、誘い文句だの殺し文句だの、いろいろ頭をひねっちゃあ書きとめておいたのさ。そうだねえ、本にするんなら、『誘惑表現実用例集』と題してもらおうかなあ」

「それなら、やっぱり紀行文にしましょうか。エーゲ海の島の女ならこう口説け、つてな具合ですよ。若衆貴族に流行りのグランドツアーには必携の本になりますよ」

「へへ。女を口説くのも抱くのも、教則本でお勉強しましょうてなやつばかりだからね」

ジョン・マレーは、ことさら自分が文芸通であるとは思わなかったが、しかしお偉方がしばしば印刷させては知己の間にばらまく私家版の詩集などとは違う言葉の輝きは、感じる事ができた。これは、上流のご婦人がたには売れるだろう。マレーはそう思った。近頃の、身分の高いご婦人方の教養の高さと言ったら。旦那がお義理で手に入れる詩集などにしても、それを真に味わえるのはむしろ奥方の方なのだ。そして奥方たちの間じゃあ口コミでたちまち情報が広まる。噂に上ったものとなれば、自分も持つておかずにはすまないということになるのだ。

「で、これ、本にするかい。やめておくかい」

「ぜひあずかつきましょう」

原稿を、まるで厄介払いでもするような態度で手渡しながら、卿の顔には瞬間照れ

笑いが浮かんだ。ジョン・マレーは、それがめったに姿を現さない、卿の無垢な本性ではないかと思った。

卿からあずかった『チャイルド・ハロルドの遍歴』の原稿を本にする段取りもあらかたついたというころ、ジョン・マレーは新聞記事に思いがけなくバイロン卿の名を見つけた。驚いたのは、女がらみや麻薬癖のスキヤンダルではなく、それが議会の記事だったからだった。しかも、新聞は「美貌の青年政治家、熱血の演説！」と、バイロン卿を褒めちぎっていたのだ。

数十年前から起こっている、繊維工業分野の技術開発の波。紡績や織布をより効率的に行う機械が次々に登場した。するとその機械を動かす動力も、人力から水力、蒸気機関へと発展を見せた。機械を導入する工場が増えていけば、それだけ職を失う労働者が増えた。不安に駆られた労働者たちが徒党を組んで「打ちこわし」の実力行使に出始めると、政府も対策に乗り出す。一八〇〇年に制定された団結禁止法を改正強化する法案が出された。

労働問題への意識は甚だ低かった。同じころ、スコットランドはグラスゴー、ニューラナーク村で紡績工場経営者の娘婿となった後、共同経営者として年少労働者の雇用を停止し学校を設立するなど、労働環境問題に尽力したロバート・オーウエンがいた。しかし彼は稀な例外にすぎなかった。一八二五年、オーウエンはアメリカに渡り理想主義的共産共同体「ニューハーモニー村」の建設を試みている。

一八一二年二月二十日の議会。上院での法案審議に際し、上院議員バイロン卿に発言の機会が与えられたのは、打ちこわしの被害にあった工場の一つが、他でもない卿のお膝元のノッティンガムにあったからだった。法案に照らせば、徒党を組むにあたってその中心となった十二人は死刑相当ということになる。

「諸先輩方もご存じのとおり、わたしは二年ほど、世界各国を見て回った。そして麗しの故郷の空の下へ帰還したその瞬間、たちまちわたしは憂愁に取りつかれた。このロンドンの曇り空のせいばかりではありません。みなさん、高みに立つ皆さん、高みに立つからこそ、われわれは下りてゆかねばならない、人民の中へ、人々が耕す平地へ、工場の立ち並ぶ街のある平地へ、われわれはおりてゆかねばならない。わたしはそうなのだ。そして、この国だけではない、世界の国々の、王侯貴族や

富裕商人の姿ではなく、耕し、紡ぎ、織る人々の姿をわたしは見てきたのだ。だからこそ、帰還したわたしは悲しんだ。どの国の労働者を見ても、我が国の労働者ほど苦しくみじめな暮らしを強いられているところはなかった！我が国の名前の上にグレイトと冠したのはいつからだったか？何を以てグレイトなどと誇るところがあるのか！われわれは、国の土台たる人民に死を与えているのか？生きるべき道を閉ざすのは、死を与えるに等しいではありませんか！それに重ねて、弾圧強化の法を通し、死罪の切符を大增刷とは、われわれの取るべき策であるはずがない！見よ、人々の失せたこの国に、機械だけが住むことになるのか。人は、はたらくために生きるのか？生きるためにはたらくのではないのか…」

新聞に載っていたバイロン卿の「弾圧反対演説」が、本当に卿の演説そのままなのかどうかは疑わしかった。こんな青臭さは、新聞が面白がつて適当に作り上げた文句だからだと思えば思えたし、また卿の場当たり的な熱情の吐露そのままなのだろう。それならば納得できるような気もするのだった。どちらにしろ、議会が、ことに上院が二十四の若造の青臭い演説で方針転換をするなどとは思われなかった。海の向こうの植民地に手を噛まれて数十年、それでもなおこの国の性根は変わっていない。

案の定、弾圧法案は可決された。バイロン卿を賛美した同じ新聞が、翌々日には淡々と法案可決を伝え、市民生活の安定と治安維持の重要性を論じているのがおかしかつた。

バイロン卿が不意にジョン・マレーの出版社を訪ねてきたのは、演説賛美記事から一週間ほどあとのことだった。上等な狩猟用ブーツに緋色のマントを羽織った卿が馬車から降り立ったのだ。日の出ているうちに善良な市民の住まう領域で卿の面と向かうというのは新鮮な気がした。婆娑羅趣味を気取ったそこいらの青年貴族並みに抑えた装いなのだとジョン・マレーはみた。ただ、筒型の帽子の異国風が目についた。

「やあ、今日はいかがしました。それはどこの被り物ですか」

「これはトルコ帽というのさ。旅の途中、総督の息子にもらったもんだぜ」

「へえ。…どうぞ、奥の方へ。うちじゃ、お茶などをお出しするよりほかにないです」

「はいよ」

別室に通されたバイロン卿は、出された茶にすました顔で口をつけるのだった。そ

の様子がジョン・マレーには可笑しくてならない。

「議会では、ちよつとした活躍ぶりでしたね」

「ああ。議場が沸いたのなんの。罵声、足踏み、紙つぶて。引つ込め若造、ぶち殺すぞ、と来たもんだ。議員様だか暴徒だかわかったもんじゃない。それでも注目だけは引き寄せちまつて、うかつなことはできない、というわけ。ニュー・ヴェニスにはしばらくおあずけだ」

「なんです。それじゃあ、貧乏くじを引いたみたいなもんですね。暴徒の味方なぞしてもいいことなしだ」

そのときジョン・マレーの目には、卿の口元に自嘲めいた笑いが浮かんたように見えた。だが卿はさつと目つきを鋭くすると、ティーカップを置いて語りだした。

「いやあ、そうじゃないぜ。こつちにやあちゃんと狙いがあるんだ。そもそも、上院のじじいどもの気が変わるわけもなし。演説の中身だつてな、ありやその場だけのきれいごとさ…労働者が貧しいのはどの国でも同じことだぜ。小作人はいつまでも小作人、その子供も小作人。耕す土地すらなくなったら、工場の中に詰め込まれる。こりゃあ、ガイ・フォークスの火薬作戦しかないかもしれんぞ。今度こそはしくじるな、と」

「…で、狙いつてなんですか？」

「あ？ああ、それさ。そろそろ、本は出せるんじゃないか？どうだい」

「ああ。ええ、今日もそのことでいらつしやったと思つてましたが」

「そうさ。いいかい、おれはね、これはいいタイミングで議会の演壇が回つてきた、と思つたわけだ。通り一遍の演説をしたつて、どうしたつて、別に国の政策が変わるでもなし、ここは一発、注目を浴びておれの名前が売れたらしめたもの、ということだ。とにかくウケることを考えなきゃ、とおれは思つた。日ごろ若造若造と叩かれるからなあ、逆手にとつて、熱血漢の清新さを演じて見せたわけだ。すると、なあ。狙いどおりだったろう？新聞があんな風に取り上げてさ。この国じゃあ、市民の胸躍つた革命はもう昔話になつちまつたし、アメリカやフランスの様子を横目に見ちゃあ、羨ましがつてるんだ。反骨の若き政治家、つていうのが、新聞を読めるような市民の間じゃウケるんだよ。で、それはつまり、あの本を買いそうな層とおんなじということになれば。すると、まただいじなのがタイミングということになる。ほとぼりの冷めないうちに、本が出せるかい？どうだい」

ほんとうにバイロン卿がそこまで考えて上院での議会演説をやったものかどうか、ジョン・マレーには疑わしかった。記事が載ってから一週間、まわりの評判からはたと気づいてこんな話をしに来たのだろうと思った。

「トルコ辺りの商人なんか、このあたりが実にうまいんだが、ものを高く売るには、そしてたくさん売るには、付加価値つてものが必要なんだな。自分の買おうとしているものがいかに価値あるものか、そういうイメージをつけるっていう意味だぜ。そうやって買い手を満足させるのさ。やっぱり我が国なんかの成り上がり商人とは気のきき方がちがうよ。まあおれの場合は、この議会で一発ぶちあげれば、その付加価値という点でただで大いに効果が上がると思ったわけだ」

これが卿の純粋な本意だとしたらやりきれないところだが、そうではない、とジョン・マレーには思われた。だが、口には出さない。あの演説でも法案は変わらず通ってしまったのだし、捕らえられたノッティンガムの十二人の運命も変わらない。そしてそのことをバイロン卿は決して忘れてはいないような気が、ジョン・マレーにはするのだった。

ジョージ・ゴードン・バイロン作『チャイルド・ハロルドの遍歴』は、上院演説の二週間後に二巻本として刊行された。卿が狙いだと言った通り、人々の記憶にはまだ情熱の青年貴族バイロンの名は新鮮なままだった。ジョン・マレーのまとめたところでは、三日間で五百部が売れた。新奇の話題を逃さぬことを誇りとするような教養人の間にはまあまあ広まったということになる。話題に乗り遅れては大変と色めく第二波、第三波が続いて、売れ行きは伸びるだろうとマレーは思った。処女詩集の時と同様、辛辣な批判をぶつけてきた書評があったが、巻き起こったセンセーションの中にかき消えたに等しかった。

この二月から三月にかけての数週間で、政治家にして詩人、美貌の青年貴族ジョージ・ゴードン・バイロン卿の名前はロンドン中に広まった。本の評判が伝わるというよりは、バイロン卿が上流社会の人々にとつての「アイドル」になっていたのだった。卿によると、その気になれば『チャイルド・ハロルド』の続きを書けるという。ジョン・マレーは当然、そうしてもらおうと思った。浪費と借金まみれの卿にも、印税が入り続けることになるのだ。

自分自身を中心に巻き起こったこの変化をバイロン卿は、

「ある朝目覚めたら、おれは有名人になってた」と表現した。

「こうしてヤクをね、しかもアヘンよりきついアムリタをな、やっているのも、これは贖罪なのだよ、君。世界に対する罪を、こうして英国人みずから負って購わんといかんのだ…」

本が売れた後、人並みに風紀を正していたのもほんのしばらくの間だけで、卿はまたこうしてこの宿に入り浸るのだ。

「先日、あなたを訪ねて若者が一人、わたしのところに来ましたよ。『チャイルド・ハロルド』を持ってね」

「へえ。君のところにかい」

「それが、身なりのよい貴族の子弟でしてね」

「そんなら、わざわざ君のところへ行かなくても、直接おれにつながる伝くらいありそうだがねえ」

「よくわかりませんが、そういう伝を使いたくないというように見えまして」

「ふうん。誰だろうな」

「もちろん、お名前はちゃんと伺ってます。パーシー・シェリー殿です」

「驚いたな。これは、すこしむずかしいことになるかもなあ」

「ご存知ですか」

「痩せても枯れても貴族のはしくれ、噂くらいは入ってくるよ。まあ君だって、シェリー家がおれの家のような落ちぶれ貴族とはわけが違うことくらいは知ってるだろう」

「まあね」

「俺より四つも若いけどね、ひよっとするとおれより問題児かも。たしか去年の事だぜ、無神論の論文を書いただけでなく、ご丁寧にも自分で本にして大学の本屋に勝手に並べたらしいな。それでオックスフォードを退学になった。社会運動だか宗教運動だか知らないが、解放解放と息巻いて、アイルランドあたりまでうろうろしているって。常に憲兵に見張られているっていうのも、おおげさではないかもな」

「それでは、あなたに近づけちゃあまずいですね」

「なに、かまわんだろ。ここへ連れてくりゃあ、憲兵だって踵を返すことになるよ」

バイロン卿は、マレーの会社からほど近いクラブで待つようにと、シェリーへ手紙で伝えた。手紙に記されていた時間をだいぶ過ぎたころ、シェリーはようやく現れた迎えの馬車に乗り込んだ。期待したバイロン卿は乗ってはいなかった。しばらく馬車は夜更けの街をぐるぐる回っているように思われたが、はじめのクラブの近くあたりで急に停車すると、バイロン卿が無言で乗り込んできた。それから馬車は夜の闇を東へと走った。

バイロン卿は長椅子に横たわって、煙草をふかしながらぼうつと天井を眺めていた。テーブルに残っている煙草に、シェリーは手を出してはいなかった。

「ロシアの軍艦の艦長が、日本で獄に入れられてるらしいぜ」

それが、ようやくバイロン卿の口から出てきた言葉だった。それまで、小一時間ほど、シェリーは一言も口を利かずにしたのだった。

「日本？アジアの話ですか」

「アジアの東の端っこの話さ。日本の、クナシリという島に勝手に上がって捕まった」

「ロシアを相手に、アジアの小国が？」

「なに、お呼びでないのに、燃料よこせだの通商しろだの、たかをくくって挑発してたらしっぺ返しを食らったのさ。数年も前から島を攻撃してた。ゴロウニンとかいう艦長がとっ捕まったのは去年の話だが、いまだに釈放の折り合いがつかない。世界に冠たる文明国だなどと図に乗っていると、どんな反撃を食らうかわからん。中国だって、インドだって、日本だって、どんな力を持つてるかわからん」

「ロシアや日本の話もいいですが…」

「いや、こりやあわが国の話だよ。ロシアと同じく、わが国の船だって、ナガサキというところにねじ込んで燃料と水を強奪したことがあるぜ。三、四年前かな」

「それは、知りませんでした」

「東の方で起こってることは、こっちのほうにも波を起こす。ロシアが日本あたりとうまく手を結べたらどうなる。武力を東へ持っていく必要がなくなりやあ、西の方へまた欲を向けるぞ」

「ロシアと言えば、気になりませんか。ギリシアの様子ですよ。あなたはあちらへ長いこと行ってたんでしょう。ロシアは、ギリシアの独立派を支援しているんです。

その意味では、われわれだって、ロシアと歩調を合わせることができますよ」

「へえ。なぜだい？」

「なぜって。あなたは、ドイツのヘルダーリンという詩人が書いた『ヒュペーリオン』という本を知っていますか」

「いや。知らんね」

「ギリシア独立に燃える青年が主人公の小説です。ギリシアはわれわれの文化の故郷みたいなものでしょう。いまそれが、トルコ人のもとで押さえつけられているんですから」

「あこがれの古典文化のふるさとかね。君、ドイツ文壇のギリシア熱はちよいと特別だぜ。国のまとまらない鬱憤が、理想主義になって噴出して、古代ギリシアをかつきあげるのだ。それに、軍事第一のプロイセン人に対して文化で逆らうっていう、ドイツ人内々の問題でもある。おれたちがあちらのものにかぶれて夢見ることはないさ。ギリシアを解放せよ、異教徒トルコ人は駆逐せよ、なんてのは、ばかな話だぜ」

「なにがばかなんですか」

「いや、ばかだね。トルコ人の文化や宗教が、いつまでもそのよそものだと思うのかい。ギリシアで、ヨアニナの領主のアリー・パシヤにもおれは会ったがね。能力があるぶん強引なやり方もするが、よく治めている。我が国と比べて特段よくないところなどないとおれは思ったねえ。彼の家は何代もそこで続いているんだぜ。…ロシアはバルカンを狙っている。救い主になってくれるわけじゃない。我が国だってそうだろう。エジプトを救いたくて手を出してるわけじゃない。むしろ大国が、利益を狙ってけしかけて、ことを起こさせるんだ。…百年後か、二百年後、海の向こうの新大陸で、おまえら白人はもともとよそ者だから出ていけと原住民が拳をあげたら、そりゃごもつともと引き上げるべきか？そうは思わんだろ。そもその出だしはともかく。土地と人間と文化なんざあ、それほどしつかり結ばれているわけじゃあないぜ。われわれ島国のものだってそこをよく知らんし、ブリテン島を攻められた記憶なんか血の中にもこつてないから、やはり理想ものをいうのだ。…君、頭の中にある憧れのギリシアなどは、もうどこにもないのだぜ」

シェリーは言い返す言葉が見つからず、黙ってしまった。バイロン卿はしばらくその沈黙を味わった後、「やらんか」といって煙草を一本差し出した。

「けっこうです。ぼくは体に気を使うたちなので。…肉も食わないくらいだから。お笑いになるでしょうが」

「べつに」

またしばらくの沈黙の後、煙をふうつと吐き出して、バイロン卿は言った。

「君のいうところの無神論というのは、つまるところ不可知論だろ」

「えっ？」

シェリーは不意を突かれた。自分のオックスフォード退学の原因になった論文事件の話が急に出てきたからだ。噂が卿の耳に届いていても不思議はないが、自分の本意を突くようなことを言われてシェリーは驚いた。だがあの論文をバイロン卿が読んでいるとは思われなかった。

「神というものを経験なる信仰心に基づいて考察するならば、絶対的に超越的なものと考えるべきであるが、であるならば、また人間の認識能力をも超越したところにあるものであるとも考えるべきである、と。その時、理性に基づいて人間の認識能力について考察するならば、神について人間が思考するというのは理性を超えた事項であり、言いかえれば非理性、非合理性に基づかなければ成り立ちえないことである、という具合にね」

「…そうです。そして、われわれが今日考察しなければならないのは人間を人間たらしめる理性のほうなんです」

「君、カントの本は読んだのかい」

「いや、…まだ読んでいません」

バイロン卿は、「まだ」という言葉に反応して、かすかな笑いを浮かべた。

「僕が勉強しているのは、ウィリアム・ゴドウィン先生の本ですよ。『政治上の正義』はお読みになりましたか」

「読んでない」

「ゴドウィン先生はわが国のルソーですよ。」

「君はわが国にもうひと革命起こしたいのかい」

「革命は、人民が求めて起こるものです。そして今、それは求められているんじゃないでしょうか」

バイロン卿はちびた煙草を灰皿に捨てると、しばらく口もきかず天井を見つめていた。シェリーは、自分が完全に受け身になっていることが少し齒がゆかった。文壇と

社交界に嵐のように現れて、稲妻を閃かすごとく名を轟かせているこの年長の貴族へつながりをつけ、主張をぶつけようとしたのはむしろ自分の方なのに。だがこの場では、卿の言葉を待たざるを得ないという気にさせられてしまう。空気がおかしくなれば、ここから帰ることもできなくなるような気がシェリーにはした。

「君には、プロメテウスを読むことを勧めるね」と、バイロン卿がようやく口を開いた。

「その神話なら知っていますよ。僕が、ゼウスにやみくもに逆らういたずら者というわけですか」

「いたずら者だって？」

「火を盗んだプロメテウスでしょう。僕はその話はきらいです。人間が火を手にしたばかりに、肉など食うようになったんです」

「君に読めと言ったのはアイスキュロスの『縛られたプロメテウス』だぜ。プロメテウスが人間に火を与えたのは、神々の世が終わることを知っているからだ。火を与え、生きるすべを与えることで、人間自身に世界を渡したんだよ。プロメテウスは予言の神だ。彼はゼウスが減びることを知っているが、その秘密を誰にも明かさず、沈黙して地獄に落とされようと覚悟したんだ。あれほど誇り高い敗北の姿といえば、他にはミルトンの描いたサタンしかない」

「なぜ僕が読まなきゃいけないんです？」

「世界を変えることは、世界を壊すことと同じだ。そして、世界を変えようとする者は、自分が壊そうとしている世界と一緒に滅びる覚悟をしろ。新しい世界は、新しい者に渡せ。そういうことだぜ。おれにやあ、君が破滅型のようにみえるもんでね。シュトゥルム・ウント・ドラングってやつ、ヴェルタータイプさ」

「…それは、あなたのことでしょ。あなたが旅から帰郷した時は、よく野垂れ死にせずに帰ってきたものだと言ってたものです」

「イカロスのごとく飛び立った、ただし目指すは太陽にあらず、女の寝床、だったっけな。気の利いた文句とはいえんなあ。」

「あなただって、議会であんな演説をしたじゃないですか。この国のありさまを少しは良くしようとしたんじゃないんですか。僕があなたに会おうと思ったのも、そのことで話があったからだ」

「じゃあ話せよ」

「あなたはどのようなつもりなんです。評判の演説にもかかわらず、結局弾圧法は通ったんですよ。ノッティンガムの市民は死罪だ。一握りの富裕商人の理屈で国が動いている。いっぽうあなたは、演説の喝采と『チャイルド・ハロルド』のおかげで一躍時の人というわけです。それで浮かれているあいだに、あの十二人は処刑ですか」

「ははあ、自由の旗を掲げて立て、ということかい」

「行動ですよ。あなたは行動すべき立場にある」

「じゃあこんどはおれが打ちこわしの先頭に立つかね。」

「問題はノッティンガムだけじゃありませんよ。国全体の社会問題です。だから、あなたに僕らの党へ加わってもらおうと、それが、あなたに会いに来た目的です。もっと大きな勢力をもつて声をあげなければ、事態は変わりませんよ」

「ガキ」

「えっ？」

「ガキ。君なんかのいう行動ってなあ、せいぜい若き日の思い出くらいしか残さんぜ。ちよいとお小言いただいたら、それでもうかたはついたことになる。で、いつのまにか平気な顔して家を継いでさ、今度は上から市民を見下ろすつてところが相場だろ」

「なに…」

シェリーが声を荒げかけたその瞬間、バイロン卿は言った。

「あの十二人は死なないよ」

シェリーは言葉を飲み込んだ。バイロン卿の言葉を待ったが、卿はそれきり黙って、

新しい煙草に手をのばす。

「おれはおれのやり方でやるんだ」

ぼそりとバイロン卿は言った。

「助け出す算段でもあるんですか」

「バスティーユ襲撃か。よせよ。最近、あるご婦人にお茶に招かれてね。はずかしながら、この詩人みずからの朗読などとサービスしたら、まあうけるのなんの、さながら現代のオルフェウスですわね、ときたまんだ」

「何の話です」

「そのご婦人の旦那は、司法長官と非常に仲のおよろしいさるお方なんだぜ。おれ

はその茶会の最中、憂鬱そうな、心ここにあらずという顔をしていた。お元気ありませんこと、お招きしてご迷惑だったかしら、などと、こっちの目算通りに尋ねてくるから、こう言ってやった。わたしなど取るに足らぬ未熟者にすぎません、いくら熱弁をふるってみたところで、愛すべき民を救うことすらできなかったのです、この際は、議席などお返して隠遁でもせねば、示しもつかぬというものです。ああ、生への不安に駆られてやむなく行動した彼らに対して、これ以上わたしに何ができるのだろう、そう想っては嘆くほありません。せめて彼らがこの世にいた証しを詩句に託して歌いましょう、奥さま、次の『チャイルド・ハロルド』をもしお読みいただけるのでしたら、どうかこの哀しみをともにしていただきたく思います。いえ、このわたしの未熟さを、お笑いになっていただければそれでよい、ただそれだけで。…とまあ、こんな具合だ。そのご婦人、しくしくと、目元をぬぐって、あななんと高潔なお方でしょう、なんてな。おれは、こんな話をもう方々のお屋敷でやったぜ。ご婦人がたの間じゃあ、『チャイルド・ハロルド』の続きが噂になってるんだよ。で、ご婦人がたから旦那へ話がうつる。旦那方、つまりは政府のお偉方だ。本の話題の大きさは既に皆さんご存じの通り。そこに時事問題がのっかったら、どれほど人々の関心を引くことだろう。そんな計算をし始める。みなさんおれがどんな人間なのかはご承知のとおりだから、何を書かれるかわからんぞとそわそわします。君、政治を動かすのは政治論だけだと思ふなよ。パンと見世物、観衆を動かして国を動かす、というのはローマだけの話じゃないぜ」

「…あなたは、処刑などしたら本に書いてやるぞ、と脅しをかけたっていうんですか」

「ふふふ。おれは、お招きいただいたところで、ちよいとご婦人がたとお話をしただけさ。君、詩の力というものは、おおいに研究すべき課題だとは思わんか。ホメロスが詩にしてくれたおかげで、われわれはアガ멤ノンの横暴なることを知ることができるんだ」

「それほどうまくいくものでしょうか」

「…おれは方々で、そんな話をしたと言ったろ。そうしたら、司法長官のご友人であるさる方の奥方からお声がかかったんだぜ。探りを入れてきたというわけさ」

「それで処刑をやめさせることができる、あなたは踏んでいるんですか」

「うむ、どうかな。無罪放免というのは無理な話だがなあ。法を通した方にやあ立

場や意地つてもんがあるからね。刑の執行猶予、時間稼ぎがいいところかなあ。数年は、獄中で待たせることになるかも」

「何を？」

「うまく手打ちができるまでさ。そう、そうすると、天の配剤、そういうものが必要になつてくるというか、うん、タイミングというか。機を捉えて事を運ばんとね」

「なんですか。ちよつと、意味がわかりませんよ」

「そうねえ。たとえば、大陸の情勢だな。わが国の政府が手を焼いているナポレオンをうまく追っ払うことができれば…」

「どうするんです」

「恩赦をくださるよう、建白するのさ。それには、何か大きな、祝い事みたいなことが起こってくれたほうがやりやすい。無罪放免、自由の身、とまでは望めないから、せいぜい、命はとらんかわりに国外追放、つてなところでさ」

「時間稼ぎとは、それまでのあいだ刑の執行を猶予させるということですね」

「いうまでもない。されちまっちゃおしまいだ」

「…国を脱出させて、あとは？アメリカですか。新天地に期する方が、たしかにこの国で死罪になるよりはいい」

「そう決まったわけではないが、そういうことになるかもなあ。ああ、でもおれはアメリカはあまり好みじゃないなあ。風流つてもんがないじゃないか。どうせならおもしろいところに行きたいものだ」

「なんです？あなたも一緒に国を離れるんですか」

「なにしろ身边がやかましくなってきたし、これから敵も作るだろうよ。旅から帰ったと思ったらおふくろが死んじまって、もうしがらみもないさ。なにより、君、女は大陸で探すに限るね。君、もし新聞に、バイロン卿また外遊へ、なんて記事をいつか見つけたら、ああ、計画がはじまったのだ、と思ってくれよ。異国での身受け元にでもなつてやるか。国を出してやった方がいいが、あとはご勝手に、じゃあな」

「僕には、僕にもなにかできることはありませんか。そんな話をただ聞いてるだけではいられませんよ」

「そうかい。じゃあ、なによりもだ、秘密を守れ。ことが實際動くまではな。今日君に言ったことが漏れたら、おれは君を殺すぞ。そして、詩を書けよ。美しい言葉は、醜いものを描くときに使う。悪魔の言葉を吐くときは、天使の装いをもつてせ

よ。社会を動かすのは人の心を動かすということだ。人の心を動かすには、人の心の足元を揺るがしてやらなくちゃならない」

「あなたはそうして詩を書いてゆく、というわけですね」

「おれかい。おれはこれから、淫慾にふけるとしよう」

「は？」

「いいかい、いつかおれはスキヤンダルまみれになって、逃げるようにこの国を出るということになるのさ。おれにはお似合いの、いかにも自然な成り行きだと思わないか。…いや、まてよ。あるいは、こうだ。君、さっきの本の話さ」

『縛られたプロメテウス』

「違うよ、君が言った…」

『ヒュペーリオン』、ヘルダーリンの」

「それよ。大々的に、新聞へ広告を出すのでしょうか。集え、自由の旗のもとに、清き剣を南国の太陽へかざせ、諸君のまなざしの輝きに劣らずきらめく剣をかざせ、諸君らの志、その証を示す時はきた、集え、精鋭のミュルミドンよ、諸君らの振るう剣の刃風をもって、アイガイエの海にかかる暗雲をはらうのだ、集え、猛きミュルミドン、海を渡る船の主は、その名も高きジョージ・ゴードン・バイロン卿なり！」

「…あなたの名前で義勇兵を募るといんですね。ギリシア解放闘争への参戦を名目に。首尾よく恩赦を受けられれば、義勇軍に紛れさせ国外へ出す」

「おもしろいことになりそうだと思わないか。そして、いつの日か新聞にこんな記事が載るんだぜ。バイロン卿、ギリシアにて客死！自由への闘争に青春を捧げて華と散る！とな。だが君、文字どおり受け取っちゃあいけない。英国人がその報に接して涙しあるいは嘲笑っているころ、おれは地中海上の船の上、エジプトをめざしていることだろう。いろいろなことが片づいて、身が軽くなったら、おれは改宗してエジプトの兄弟のところに行くのさ」

「改宗ですって？エジプトの兄弟って誰なんです？」

「聞いて驚くなよ、その名も高きエジプト総督、ムハンマド・アリーの息子、イブラヒムだ。去年、ギリシアで知り合ってたな。やつも、父君も、生まれはマケドニアなんだそう。意気投合ってやつでね。やつにコーランを説いてもらったんだよ。それにいたく感銘をうけ、論議するまでになった。そうしたらやつは、兄弟としてむかえたい、わたしのほうが一つ年下だから、あなたが兄だ、と来たよ」

「なんだか、あたまがクラクラしてきましたよ。アヘンもやってないのに、あなたの話で目が回る思いです」

「ふふふつ、とにかく、おれが異国で死んだという知らせを目にしても、悲しまなくていいぜ。ああ彼は、彼の心は自由になったのだ、と喜んでくれ。：君、自由の対義語はなんだと思う？」

「え？それは、不自由：抑圧、支配、ということでしょう」

「それは、甘い。自由の対義語は、死さ」

「：あなたなら、死は自由になることと同じ、などと歌いそうですが」

「死なんてものは、なにもわからん。死んだらどうなる？実のところ、生きてる者には誰にもわからん。神と同じく、あちら側のことは、おれたちにはなにもわかりっこないのさ。我らが理性を束縛する最高の非合理、究極の不自由というわけだな。と、いうことはだぜ。生こそ、生きてあることこそ、自由の同義語なのだ」

「では、僕などはまだ十分に生を知らないということになりますね」

「おのれ自身の生を求めよ、だぜ。死などというものは求めるまでもなく押しつけられるからなあ。おれは死の知らせで世間を煙に巻いて、いつか、自由を掴みに行くのだ。いつか、な。君、知ってるか、エジプトの都には、伝説のアレクサンドリア大図書館由来の古文書が豊富に残っているのだそうさ。おれはそうした文書でも研究して、かのプラトンが記したアトランティスの謎でも追うぞ」

しかし、やがて詩人として名をなしたシェリーが、バイロン卿の死の報に接するとはなかった。なぜなら、シェリーの方が早くその命を散らしたからだった。

一八二二年七月、イタリア西海岸はレーリチに滞在していたシェリーは、友人を訪ねた帰途の船上で嵐に遭遇した。ヴィアレツジョ付近の海岸に打ち上げられた船体に残っていたシェリーの遺骸は、バイロン卿にも引けを取らぬ評判の美貌も見る影なく、無残な姿に変わり果てていたという。

保健衛生上の都合であるという当局の指示で、遺骸はほどなく海岸で茶毘に付された。そこには、滞在先のピサから駆け付けたバイロン卿もいたという。

バイロン卿がイギリスを離れたのは一八一六年のことだった。前年の、ナポレオンの百日天下からセントヘレナ流島の騒乱がまだ記憶に新しく、関係諸国のウィーンで

の会議とその議決への諸民族の反発で、大陸は未だ波立っていた。中立国スイスはレマン湖のほとりにバイロン卿は山荘を借りて過ごした。するとほどなく、シェリーがそこへ尋ねてきた。

シェリー畢生の大作となった詩劇『縛めを解かれたプロメテウス』が出版されたのは、一八二〇年のことだった。

一八二一年、ギリシアに広く勢力を持っていたアリー・パシャを除くべく、トルコはイスタンブールの帝国政府が動いた。一地方領主たるアリー・パシャだが、長らく半独立状態にあり権勢を誇って中央と対立していたのである。その抵抗は長くは続かなかったが、この事態に刺激されるように民族解放結社が立ちあがり、ギリシア独立戦争が始まった。やがてトルコ帝国政府は事態鎮圧のためにエジプト総督ムハンマド・アリーに出兵を要請する。一八二五年、それに従い一万の戦力を率いてペロポネソス半島南部に上陸したのは総督の息子、イブラヒムであった。対してロシア・フランス・イギリスがギリシア支援へまわり、やがて列強三国は、ペロポネソス半島はナヴァリノの沖でオスマン・エジプト艦隊を撃破、ギリシア独立はこの三国の権勢力学の中で進んでいく。

一八二三年七月、バイロン卿がヨーロッパ各地で義勇軍への参加者を募っているというニュースがイギリスにも伝わってきた。ジョン・マレーも新聞でその記事を見た。本国の土地も売り払って資金を作ったらしい。さすが、義賊と見込んだだけのことはある。しかし、卿のあれだけのトルコかぶれもあてにならないものだ。今度はそのトルコ相手の戦争をするというのだ。それもまた、卿らしいということか。その卿らしさゆえの危うさのようなものをジョン・マレーは感じずにいらなかった。

案の定というほど確信していたわけでもなく心のどこかで予感していた、こんな報をジョン・マレーが目にしたのは翌年のことであつた。

「ジョージ・ゴードン・バイロン卿、自由への闘争にて華と散る！ 四月十九日、ギリシアはミソロンギにて、熱病のため。享年三十六。」